せきのつじょう

関津城遺跡 現地説明会資料

― 宇野氏の居城 ―

関津城遺跡の遠景（南から、手前が調査区）

平成 22 年(2010 年)8 月 8 日

調査主体　滋賀県教育委員会

調査機関　財団法人滋賀県文化財保護協会

第１図　関津城遺跡と周辺の中世城館

１．　調査の経緯

財団法人滋賀県文化財保護協会では、大津市関津の**関津城遺跡**の近接地において、国道 422 号大石東バイパス道路改築工事が計画されたことから、平成 21 年８月から発掘調査を実施しています。

関津城は、承久３年(1221 年)の承久の乱後、佐々木六角氏の旗頭青地氏に属する宇野氏が代々、居城を構えたといわれています。**宇野氏**は、承久３年（1221 年）の承久の乱の際、清和源氏の流れをくむという宇野源太郎守治が戦功をたてたことから、恩賞として鎌倉幕府から関津城を与えられたといわれています。関津の称名寺には、宇野氏の墓と伝えられる五輪塔が残り（銘はない)、大石龍門の八幡神社には、天文９年（1540 年）の棟札に「田上関津宇野美濃入道」の名が伝わっていることから、後の子孫も長く城主を務めたと思われます。しかし、城の構造や、いつ築造され、いつ頃まで機能していたかなど、よくわかっていません。

なお、『滋賀県中世城郭分布調査３(旧野洲・栗太郡の城)』によると現況は、「曽根池に入る谷の南北の尾根上に約 10 か所の曲輪と空堀・土塁を残し、特に最大の曲輪は 30m×26mの規模をもち、虎口付近は複雑な構造をもつことから戦国終末期の縄張りである」と推定されています。

２．これまでの発掘調査の状況

道路予定地内において、土塁で囲まれた曲輪跡が３ヶ所に残存していました。それぞれ北裾の曲輪を第１調査区、西裾の曲輪を第２調査区、頂部の曲輪と竪堀および北裾・西裾の曲輪までの斜面を第３調査区としました。

これまで、戦国期の城郭を大規模に発掘調査した事例は、全国的にもあまり例が無く、特に滋賀県内においては、今回の発掘調査事初めてあり、築城当初の城郭の姿が明らかとなったことで、城郭研究の手法に一石を投じることとなります。

３．調査の成果

発掘調査面積は、約 2,200 ㎡です。今回は、これまでの調査で明らかになった第２調査区とその南東上段部で確認された礎石建物と焼失建物について報告します。

（１）第１調査区（北裾の曲輪）

第１調査区は、現在調査中ですが、土塁とその内側をめぐる排水溝のほか、ピット・土坑・溝を検出しています。また、調査区南西隅には東西方向に開口する虎口があり、北側の土塁端部は周辺の土塁よりも一段高くなり、階段状の石組みが見つかったことから櫓台と想定できます。

また、この虎口の部分には２個の礎石と２個の柱穴が見つかったことから、櫓門が設けられていたと考えられます。

（２）第２調査区（西裾の曲輪）

①主な遺構

第２調査区では、約 20㎝の遺物包含層を除去した後、土塁および曲輪壁面とその内側をめぐる排水溝、礎石建物（建物１～３）のほか、井戸・ピット・土坑・溝を検出しました。建物１の建物内には、酒や油などを貯蔵したと考えられる甕倉（埋甕）が備わっています。

なお、建物１～３は３～４回の建て替えが行われています。

②主な出土遺物

礎石建物の周辺や溝から、調度品を飾る金属製品、武器・武具、鉄釘、漆器などが多数出土しています。調度品では、屏風の押縁や銅製の鋲、何らかの容器か小型の厨子を飾る銅製の飾金具や蝶番、用途は不明ですが亀形の銅製品などがあります。武器・武具では、鉄砲の弾、鎧の鉄製脇板などが出土しています。また、漆器椀も出土しています。

主な遺物の詳細は以下のとおりです。

調度品

＊押縁（おしぶち）

長さ 200mm、幅 16mm、厚さ２～３mmの銅製の飾金具で、屏風の縁を押える金具です。表面の周縁を沈線で囲い、全体に魚々子打ちが施され、五三桐文が向きをそろえて５か所に彫金されています。また、両端は花頭状で、直径２～３mmの釘孔が２か所あり、下端側には銅釘が残っています。全体に煤が付着しています。

＊銅製の鋲（びょう）

半球形の頭をした鋲で、屏風に使われたものと考えられます。

＊銅製飾金具（どうせいかざりかなぐ）

残存長 80mm、幅 15mm、厚さ２mmの銅製飾金具で、両端は花頭状です。何らかの容器、もしくは小型の厨子などの縁を飾る金具と考えられます。

＊銅製蝶番（どうせいちょうつがい）

調度品の開閉のために取り付けた金具です。何らかの容器か小型の厨子などに使われたものと考えられます。

＊亀形銅製品（かめがたどうせいひん）

銅製の板材を加工して、亀の手足を表現しています。胴体は十字の透かし状ですので、何か別の部材を取り付けて頭部や胴部を表現したものと考えられます。特に棒状の突起は頭部を取り付けるためのものと考えられます。手足を含めた長さは 75mm、幅 80mmです。

武具

＊鉄製脇板（てつせいわきいた）

鎧・胴丸・腹巻などの側面にある板です。

＊鞐（こはぜ）

甲冑の金具で、肩上と胸板をつなぐ紐、肩上と籠手をつなぐ部分の紐などに付けられた仕掛けです。

食器

＊漆器椀（しっきわん）

大型の漆器椀で、高台裏に「雲」の墨書が残っています。

＊輸入陶磁器

中国製の青花、青磁、白磁、天目茶碗、朝鮮製の壺などがあります。

城の曲輪から、これだけバラエティに富んだ遺物が出土することは稀です。城主である宇野氏の実態は、よく分かっていませんが、近江の南の玄関口である瀬田川と関津峠を眼下に見下ろすこの地に居城を構えた当時の武士団の生活ぶりを如実に示す資料と言えます。

（３）第２調査区の南東上段部

①主な遺構

第２調査区（西裾の曲輪）の南東上段部で、土塀を伴った土蔵施設（建物４）を検出しました。

内法が約 3.9m×3mの長方形、幅約 30㎝、残存高約 20 ㎝の土壁が残っていました。その内側は焼成を受けて赤色化し、さらにその内面には多くの焼土や炭、焼けた板、焼けた壁土が残っていました。

土壁の基礎には、地覆石として石を一列に並べていました。また、壁内側に建てられた角材も炭化した状態で残っていました。

②主な遺物

内側の焼土や炭の中から炭化した米や麦が出土しました。また、床板や野地板を打ち付けるのに使われた鉄釘も多数出土しています。

(4) 第３調査区（頂部の曲輪）

第３調査区では、土塁・礎石建物を検出していますが、現在も調査中ですので、詳細が明らかになりましたらあらためて報告します。

４．発掘調査からわかる関津城の性格と構造

今回の発掘調査で明らかとなった成果は、以下の３点にまとめることができます。

（１）戦国期城郭（土造り城郭）の防御機能の高さを具体的（視覚的）に明らかにした希有な調査事例です。

戦国期城郭における急勾配**「切り岸」**は、現存城郭の状況から想定はされていましたが、想像を絶する「切り岸」（場内への敵の侵入を防ぐため、斜面を急峻に整形する防御機能）の状況が明らかとなりました。その規模は、主郭から下段の郭までの間で、高さ約 15m～20m、斜度は 45°～60°、一部 90°に近い急勾配であり、敵を容易に寄せ付けない高い防御性を具体的に示すものです。

また、城郭の変化として「土造りの城郭」から「石造りの城郭」に発達したと捉えられてきましたが、今回の発掘調査によって、土造り城郭の高い防御性が具体的に明らかになったことで、土造りの城郭が石造りの城郭に「劣る」とは一概に言えないことが明らかとなりました。

（２）全国で初めて、戦国期の城郭の中から、地覆石を基礎とし、さらに上部構造までが具体的に判る「土蔵」が発見されました。

戦国期の城郭からの蔵の発見例としては、大阪府高屋城、兵庫県置塩城、山口県大内氏館などが知られていますが、多くは、地面を掘り窪めて壁面に塼を並べる塼列式と称される建物で、土壁を伴うものと考えられてきました。

今回発見された建物４は、これまでに城郭内から発見された蔵とその構造が大きく異なります。地面を掘り窪めることなく、むしろ、基盤を削り出すように地面より高いところに建築され、壁の基礎に地覆石(じふくいし)を敷き並べ、この上に壁を立ち上げています。

また、屋根構造が土屋根で、さらに、その上を植物素材（萱等）で葺いていると想定されます。これらは、近世の土蔵に近い建築技法であり、このような建物が 16 世紀後半代の城郭（戦国期の城郭）から見つかった事例はありません。

さらには、この土蔵が火災を受けて、すぐに、土を被せて整地したことにより、基礎部分の残存状況がきわめて良好であることも注目されます。

土壁はその厚みが 30cm 程もあり、近世城郭の天守級の建物に匹敵する厚さです。壁の立ち上がりは、基礎から 20cm ほども残った状況で、壁内側に立てられた柱（15cm×15cm の面取り角材を使っていた）が炭化し残存していました。

また、建物内の埋土から大量の釘や炭化した穀物が出土しています。釘はいずれも５cm 程度の短いもので、梁に野地板を打ち付けたものと想定され、この土蔵が穀物蔵であったこともわかりました。これまで戦国期の土壁がそのままの状況で発掘された事例はありません。

（３）城郭内の空間利用の形態が、遺構、遺物の双方から具体的に想定できます。

今回の調査で見つかった建物は、櫓台、建物１・２・３・４、主郭建物で、この内、主郭建物は現在調査中ですので、その性格は明らかにしがたいですが、位置的に考えてこの城郭の中心をなす建物であると考えられます。

その他の建物としては、以下の建物があり、何れも礎石建物です。

建物１　西端に位置し、礫敷の床を持つ。　**→床構造から倉庫的な建物**

建物２　中央に位置し、規模構造は不明であるが、井戸を伴う。　**→炊事に関連する建物**

建物３　東端に位置し、多量の皿を中心とする陶磁器、土師器が出土し、城主の威信具と考えられる屏風に用いられた金具をはじめとする、金属製品が集中して出土。
→城主が饗応に用いる財を収めた蔵

建物４　中段にある土蔵建物。大量の炭化穀物が出土。　**→穀物蔵**

戦国期の城郭の発掘調査事例の増加に伴い、建物遺構あるいは遺物から、城郭内の空間利用が、単なる「戦闘」だけでなく、日常生活や儀礼といった多面的な使い方がされていたと想定されるようになってきています。

今回の発掘調査では、未調査部分および調査途中の部分がありますが、城内における日常な生活に伴う空間利用の様相が具体的に明らかになりました。城郭＝戦闘という一方向的な評価では城郭を理解することができないことを示した点で重要です。

すなわち、城郭の空間利用として「戦闘の空間（櫓台・切り岸・虎口構造)」「褻［ケ］＝日常の空間（今回見つかった礎石建物群、井戸)」「晴［ハレ］の空間（威信、饗応財を用いた空間で今回未調査部分に想定)」の使い分けがなされていたことを示しています。また、第２調査区では、３～４時期の建物の建て替えが行われていることが確認されており、生活の場としての城郭が維持され続けたことを示しています。

《用語解説》

曲輪（郭、くるわ）

堀･土塁･石垣などで囲まれ、平坦化された城の一区画。中世の山城では、単郭式のものから複数の曲輪をつらねた連郭式への発展がみられる。近世では丸と称し主郭を本丸とよぶが、中世では実城（みじょう）・一の郭などとよんだ。城の中心部と城下町などの周辺部を区別し、内郭・外郭（惣郭）とよぶこともある。

堀

防御･区画･用水などの機能を持つ溝。平地の城館では、水堀が領主の用水掌握の手段となる例が多い。山城では空堀の発達が著しく、尾根を断ち切る「堀切」、等高線と平行にのびる「横堀」、斜面を細長く掘り下げる「竪堀」、これらを連続させた「畝状空堀群(畝状阻塞･連続竪堀群)」が戦国期に各地で見られる。また、堀底を遮断する工作を施したものとして、障子堀･畝堀などと呼ばれるものがあり、後北条氏に使用例が多い。

土塁

土居ともいう。城館の防御のための土手。戦国期の城館では空堀とともに縄張をつくりだす主要な構成要素であり、東国では近世城郭でも一般に用いられた。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたりまして、地元関津町の方々、関係機関の皆様には、ご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

第２図　関津城遺跡　主な遺構配置図（S=1/1,000）

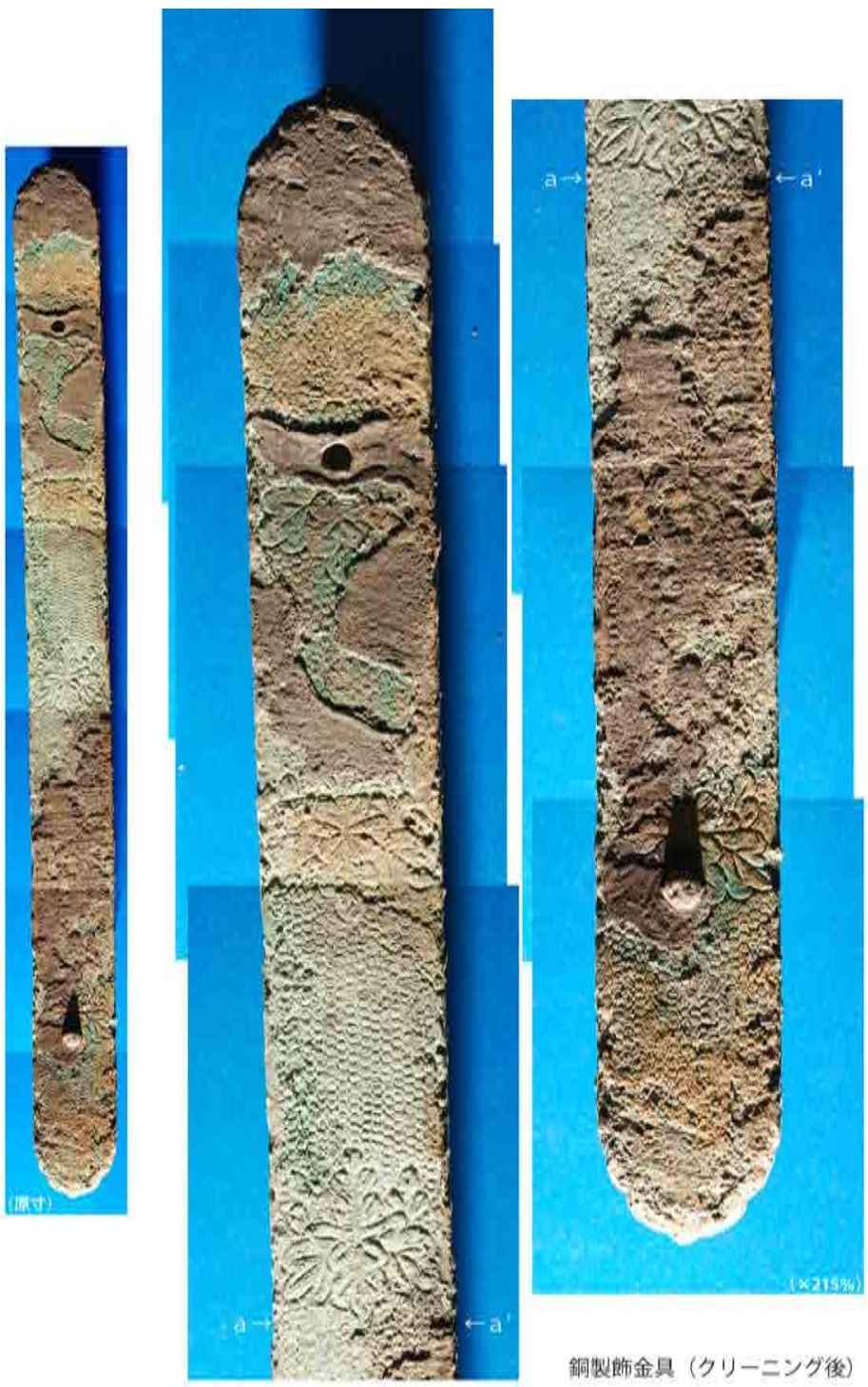
第 2 調査区　全景（北から）

第 2 調査区　全景（南から）

第１調査区　櫓門跡

第２調査区　建物１と甕倉（南から）

第２調査区　土蔵（建物４）



押縁（長さ 200mm× 幅 16mm× 厚さ２～３mm）

銅製蝶番（左）、銅製亀形金具（右）